

## 西部地区講習会報告

構音指導を学ぶ会（全2回）

第1回 令和2年 7月 4日（土）

第2回 令和2年 9月 7日（土）

2回とも9：30～11：30

会場 浜松市教育センター

内容 講話 「構音指導を学ぶ会」

講師 浜松市立可美小学校 白井 有希乃先生



<研修内容・感想>

第1回 構音の発達と、構音指導のための専門用語

第2回 構音障害とは 基礎知識と実践基礎 異常構音

○感想

コロナウイルス感染症の状況を見て、3回予定していましたが、2回にさせていただきました。構音障害、用語や検査方法について、また、実際の指導の仕方について、初心者にもたいへん分かりやすく、基礎のところを説明してくださいました。また、工夫された教材も御紹介いただきました。構音指導については、医療的なこと、専門的なことがたくさんあります。今後このような講座を引き続き行い、教師のスキルアップをしていく必要があると思います。

西部地区担当者講習会 令和2年12月12日（土）9：30～11：30

○オンライン会議システム「Zoom」にて

○内容 講演 「吃音のある子どもに対する指導の実践」

講師 横井 秀明 氏（言語聴覚士 なるみ吃音相談室代表）

<研修内容・感想>



**横井先生より**

吃音があっても、特に困ったり悩んだりしていない人の方が実は多数派かもしれない。⇒「治し方」だけでなく、持続した場合の対応や指導が重要になる。重症化を止めるには、ブロックが生じた際に出てくる「もがき」（力んで無理やり言葉をひねり出そうとすること）を止め、代わりにどうしたらよいかを教える。「もがき」とは、困惑に近い怖さであるため、それを起こさないようにするためには予防が必要になる。子どもたちに、吃音を過剰に不安に感じたり、怖がったりさせないために不安や恐怖への対処行動を変えて、吃音を正しく認識させることが大切である。

吃音は、「単なる現象」⇒①子ども前で指導者がわざと吃ってみせ、何事もなかったかのように、いとも簡単に修正する様子を見せる。②発話症状を子どもにとって最もしっくりくる表現で命名させる。（例：つかえる、弾む、つまる等）また、ブロックが実際に「どこ」で「どう」起きているか考えさせたり、感じさせたりしながら、舌などの発声発語器官の動き方の違いを感じさせることで、口の中での単なる現象にすぎないことが分かり、意図的に吃音を解除できる。子どもたちは、楽な吃り方が分かれば、無意識のうちに苦しい吃りを楽な吃りに変えていく。子どもたちには、自分の話し方を変える力がある。私は、その背中をそっと押してあげる。

**感想**

- ・幼児から児童低学年対象の内容が盛り込まれていて、とても参考になりました。
- ・つまりながら止まりながらもお話くださる先生の、「伝えたい」という熱いお気持ちが伝わってきました。
- ・吃音の捉え方は保護者も子どもも様々で、積極的に吃音と向き合う指導はできずにいましたが、これからは子どもの気持ちを大切にしながら、オープンに話してみようと思いました。
- ・今回のような積極的な指導法は初めて知りましたので、今後も御指導いただければ嬉しく思います。